キャラクター名
石田　貞男

プレイヤー名

シンドローム	オルクス オルクス	ワークス	フリーター	カヴァー	おぢさん
オプショナル		年齢	34歳	性別	男
覚醒	素体	衝動	吸血	初期侵食率	33 %
出自	親戚と疎遠	経験	永劫の別れ	邂逅	秘密、ローザ・バスカヴィル

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	2	0	0			2
精神	2	0	3	2		7
社会	4	0	0			4

HP	29
行動値	11
(非装備時)	11
戦闘移動	16
全力移動	32

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ	4		交渉		
回避			知覚			意志	1		調達	1	
運転：	2		芸術：			知識：	2		情報：ウェブ	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
1+2+5【フルバースト・大地の牙】	ＲＣ	14r+4		3		ドッジダイス-１個同エンゲージ不可、CL8
1+2+5【限界突破・大地の牙】	ＲＣ	15r+4		4		ドッジダイス-１個同エンゲージ不可、CL7
2+4+8【掴めざる心臓】	ＲＣ	14r+4				６　CL8
1+2+6+7+武器【切り札100↑】	白兵	8r+1		2(+10)		ドッジダイス－１　武器壊れる　CL7

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
思い出の一品	
コネ：UGN幹部	
パイルバンカー	
応急キット	
コネ・アハト	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
親戚	P 親近感	N　悔悟		
純血統	P	N		
アハト	P　庇護	N　不安		
スズリ様	P	N 不快感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　10	残り財産P：　1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
コンセントレイト	2	2						
効果：								
アニマルテイマー	6	3	メ／リ					
効果：判定＋［LV+1］個								
支配の領域	1	6	オート	視界	単体			
効果：対象の判定ダイス目を１に変更する。シナリオLV回。								
幸運の守護	1	1	リアクション	至近	自身	RC		
効果：〈RC〉ドッジ								
大地の牙	1	1	メジャー	視界		RC		
効果：攻：＋［LV+2］。ドッジダイス-１個同エンゲージ不可								
オーバーロード	1	3	オート	至近	自身	自動	80↑	
効果：武器攻撃力2倍、メインプロ終了時武器破壊								
形なき剣	1	2	メジャー	武器		(白兵)(射撃)		
効果：ドッジダイスー[LV]個								
リフレックス	2	2	リアクション	至近	自身	シンドローム		
効果：CL値-LV								
機械の声	★		メジャー	至近	効果参照			
効果：因子を埋め込み自動で動かす								
成長促進	★		メジャー	視界	シーン(選択)			
効果：植物を成長させる								
効果：								
効果：								
効果：								

　俺が石田貞男になってから、随分と時が経ったように思える。
　もう十年以上も前の話だ。
　俺は物心ついたときから19歳まで、とある非人道的な組織の管理する、研究施設にいた。
　今思えば、そこはFHの戦闘員を育成する為の施設だったのかもしれないが、建物はおろか周辺の地形ごと消し飛んでしまったため詳細は不明なままである。
　俺は身寄りがない孤児で、施設には他にもそういった子供が沢山いた。
　人里離れた場所に建設されたそこでは、各地から集められた子供達を利用した人体実検や戦闘訓練などが行われていた。
　無理やりオーヴァード化させられ人殺しの技術を叩き込まれる毎日。
　そんな日常を壊す計画を立てたのは、実検体の中でも特に優秀と評されていた、ノイマンとブラムストーカーのクロスブリードの少年だった。
　結果として、彼の尽力と施設内の協力者の助けにより、子供達の大半は施設を脱走することに成功するが、彼を含め何人もの同胞が犠牲になってしまった。
　俺もその時逃げ延びた実検体の一人なのだが、この件についてはまた別の誰かが詳しく説明してくれるだろうから、今回はその後の、つまり俺が【石田貞男】になった経緯を話そう。

　もう爆発音は聞こえず、燃え盛る赤も目に入らなくなった。
「はぁっ、はぁっ…」
　全身傷だらけで、着ている【0030】と書かれた白い服もボロボロ、そんな有り様の少年は走っていた、ところ狭しと生い茂った木々の枝で、月の光すら差し込まない闇夜のなかを。
「止まれ、ない…まだ、止まれないんだ!」
　精一杯腕を振り、一心不乱に大地を蹴る彼の移動速度はアスリートも顔負けで、普通の人間でないことが伺える。
「やっと、出たんだ…外に…!」
　だが、驚異的な身体能力を持っている少年にも限界はあるらしく、段々とふらついたり躓くことが増えていた。
「まだだ…まだ!」
　そうして、道すらない森のなかを進むうちに、遠くのほうに小さな灯りが見えてくる。